

牛乳で

夜を染めたい

鈴江俊郎

登場人物

津島典弘

伴 ゆりか

大池日向子

小坂ゆう

向田千恵

小川原浩／浩子

長島宏樹

高山聡子

※小川原を女性で演じる時は台詞を【 】に示しました。

## 第一場 休み時間

生徒たち皆がそこにいる。

三々五々、座ってる奴、机に座ってる奴、パン食ってる奴、いろいろだ。

高山 だから。せっかくだからさあ。

長島 いやいや。わからない。

伴 うん。

高山 どうして。なにがわからない。

長島 だって。なあ。

伴 うん。

長島 なにその。プレゼント。先生に？

伴 うん。

長島 わからないよなあ。

高山 だからなに。なにがわからないの。

長島 誕生日だからって。なに。いくつ？高山。

高山 十七です。

長島 何年生？

高山 二年生。

長島 一年遅れてるくせに。

高山 遅れてます。長島君だってそうじゃないの。

長島 そんな。小学生じゃないんだよ。どうしてそんな子どもっぽいことをさ。なあ。

伴 うん。

長島 なあ。

伴 うん。

高山 なにさっきから伴さん「うん」しか言っていないじゃないの。

長島 そりやだつてそうでしょう。そりやだつてそうでしょう。そりやだつて。

伴 うん。

長島 (間) そりやだつてそうでしょう。

伴 うん。

高山 だから伴さんが喋ってない。

伴 ごめん。だからでもどうしてそういうことなのか、

高山 お礼でしょ。

伴 うん。

高山 お礼がしたいでしょ。そう思わない？

伴 うん。

高山 ほら思うじゃん。思うでしょ？あんな一生懸命な先生なんだから。ほらほら。

長島 伴さんごつちも「うん」って言ってあつちも「うん」って言って。

伴 あごめん。

長島 どつちなんだよ。はつきりしてよ。

津島 俺いいと思う。

長島 うわいきなり参加するね。

津島 いやだつて俺いいんじゃないかなと思うから。

高山 ほらほらほら。皆いいんじゃないかなと思ってるんだつて。あんなにいい先生なんだから。小川原先生。

伴 うん。

長島 また「うん」って言った。

伴 あごめん。これ癖だから。

高山 なに癖って。

伴 あいづちだから。ただの。「右行く？」「うん」。「左行く？」「うん」

長島・高山 どつちなんだよ。

津島 俺いいと思うんだよね。小川原先生。

長島 またいきなり話もどすね。

津島 ていうかこの学校。学校がいいと思うんだよね。

伴 うん。

長島 今のどっち。

伴 今のは相槌じゃないよ。今のは「そうですね」ってこと。

高山 わかりにくいな。伴さんの会話は。

津島 俺小学校でも勉強できなくてさ。中学校一年で親離婚してさ。

伴 うん。

津島 中学二年でやんちゃ野郎に变身してさ。中学三年で鑑別所いつてさ。お情けで中学卒業してさ。学校つていつたらもう全然相手してくれない場所って感じだったのにさ。

伴 うん。

津島 ましてやまわり道してさ。何年も人より遅れて高校入ってさ。入れると思つてなかったのにさ。入れてくれてさ。この定時制。

伴 うん。

津島 何回落第しても退学しろ、さつきと出ていけ、って言わないもんな。がんばれがんばれって。夜の高校つて違うんだよな。昼の高校とどうしてこんなに違うんだろうね。

伴 うん。

津島 俺なんかもう二十三だしさ。こ百体四年目なのにさ。なのに二年生なのにさ。

伴 うん。

津島 出て行けつて言わないんだもんね。びっくりだね。

高山 そりゃ津島つちががんばってるからさ。なんかもう右にかじりついてても、つてもう見た目からしてせつなくなる。

長島 どうして。津島つちいねむりはつかじやん。

高山 だってそりゃ昼間の仕事で疲れてるから。

長島 俺だつて疲れてるよ。

高山 長島ただのコンビニでしょ。フリーターでしょ。暇だから働いているだけでしょ。

長島 うわ。違いますね。俺は自分の小遣いは自分で。

高山 小遣いじやん。お母ちゃんに「昼間ブラブラしてるんだつたら小遣いやらんつて言われていやいや働いてるだけじやん。津島つちは違うんだよ。奥さんと子どもを抱えてだね。生活費だよ生活費。工場労働者だよ。

長島 えらいのか。工場はえらいのか。

津島 えらくないよ。塗料を缶に詰めてるだけだし。

伴 (手を上げる)

高山 はい。伴さん。

伴 えらいんだと思う。

長島 え。なに。

伴 私そういう人がえらいんだと思う。

長島 なに。どういうこと。

高山 そういうがんばる人が偉いんだつてことでしょ。今までは違うと思つてたんだよね。でもここに来てなんか違うなあとと思うようになったんだよね。

伴 うん。

長島 またあいづち。

高山・伴 今のは違います。

津島 みんな、偉いよ。

高山 なに。

津島 違うよ。みんなが偉いと思うんだよ。俺。

長島 みんなってだれ。

津島 ここの。みんな。

長島 どこが。どうして。

津島 昼の高校行けなくてさ。なんか一回くじけてるのにさ。でもがんばってる。

長島 頭悪かっただけじゃん。

高山 頭悪いっていうな。

津島 伴さんなんか違うんだよ。頭悪いことはないんだよ。

伴 私昼間の学校続けられなかっただけだから。

津島 続けられないっていつてもいろいろあるよ。しかたない理由が。

高山 そうだ。

津島 中学のとき学校行けなかったのがんばって高校は来てる。

長島 うん。

津島 大池さん。小阪さん。向田さん。

高山 そうだ。

津島 お父さんがお母さんが離婚しちゃってお父さんが出て行ってお母さんが病気だからほんとに働かなくちゃいけなくて高校途中でやめた。

長島 うん。

津島 伴さん。

高山 そうだ。

津島 勉強が全然好きになれなくて昼間の高校に入れなかったから来てるだけの人もいるけど。

長島 うん。

津島 長島くんに高山さん。

長島 うん。

高山 そうだ！……はずかしい。

長島 うれしそうだよおまえ。

津島 だけどさ。みんなに馬鹿にされるし小さくなつて生きていかになくちゃしかたないようなのばっかりなのにさ。

伴 うん。

津島 一番えらいのは先生じゃないかな。小川原先生みたいな先生がいるからさ。こんなふうなさ、みんな通つて来れててさ。やめてるよ？あんなんじゃないかな。

長島 いや。もう。わかった。わかったわかった。だけどさ。

高山 なにさ。

長島 恥ずかしいよ。

高山 なに。

長島 恥ずかしいって。もう俺たち高校生なのに。子どもじゃないのに。そういうのはさ。卒業式の日にしようよ。卒業式だったらさ。なんかきちんとそういうのやつてくれ。って場所じゃん。

伴 うん。

長島 な。

伴 うん。

長島 昼間の高校いつてる友達にさ。笑われそうだもん。俺 ちょっとそういうの堪忍。

伴 うん。

長島 また伴さんうんうん、うなづいて。

伴 あ。ごめんささい。

高山 なによそれ。長島はやっぱ恥ずかしいんだ。なんだそれどういうことそれ。

長島 なんだよ。恥ずかしいって言ってるんだよ。恥ずかしいんだって。最初から言ってるじゃん。

高山 違うよ。夜の高校に来ててさ。定時制高校に来ててさ。そういうの自体が恥ずかしいんだ。

長島 なんだよそれ。

高山 そうでしょ。昼間の高校いつてる人が普通で、OKで、えらい人で、夜の高校来てる人は私たちみたいな人はだめで、普通じゃなくて、四時半から学校来てるのが恥ずかしくて、四時間しか授業ないのが恥ずかしくて、一時間目と二時間目の間にちょっと長い休み時間があつてその時にパン食べたりお弁当食べたりするのが恥ずかしくて、

長島 なんだよそれそんなこと言っていないだろ。

高山 言ってるんだよ。長島言ってるんだよ。長いって言ったってそんなにゆっくりじゃないからおなかへつてる津島つちなんかあわてて牛乳飲んでむせちゃつてふいちゃつてふわーって机やら床やら真っ白に染めちゃつて時々そういうことがあつて大騒ぎになっちゃつてそういうのが恥ずかしくて恥ずかしくて

長島 そんなこと言っていないだろ俺はただクラス全員でプレゼント買う、ってそういうこと自体がさ。

高山 前からそうなんだよ。長島は馬鹿にしてる。この学校をやっぱ馬鹿にしてる。それはなんていうかね。

ここにみんなの言葉かにしてることになってね。でついでに自分のことを馬鹿にすることになってるんだよ。自分のことを馬鹿にしてる人が一番かわいそうなんだって立派じゃないんだって偉くないんだっていかげんそういうの割り切ったらどうなの。割り切れないからいつまでもよくよくよくよく

長島 ああ。ちょっと待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて

高山 なに。

間。

長島 そんなさ。

高山 うん。

長島 簡単に割り切れるか。もちろん割り切っていないって。

伴 うん。

長島 けどそんなのだけだったら来てないって。

高山 そうかな。

長島 ここ卒業するの半分くらいなんだよ。半分も途中でやめちゃうんだよ。昼の高校と全然違うんだよ。

津島 うん。

長島 がんばってない奴は来れないって。

大池、立つ。

伴 あれ。大池さん。

大池 ……（止まり）

伴 どうしたの。話、退屈？

大池 帰る。

高山 帰るの。

伴 まだ一時間目終わったとこだよ。

大池 私、がんばってないかもしれないし。

伴 え。

## 第一場 授業

照明が変わる。

小川原、ゆつくり入場。

ほかの役者たちは椅子に座る。

小川原にだけ照明が当たる。

小川原 私、三十七歳です。県の教員採用試験を目指して勉強し始めたのは大学三年生の春でした。私の時代は特に社会科は募集人員が少なく、合格するのは宝くじみたいな確率でした。合格しなかったので常勤講師として働きながら受験勉強をしました。昼は教えて、夜は受験勉強です。五年かかりました。やっと合格しました。やっと解放されました。大学受験、高校受験、僕は中学も私立ですから中学受験。留年とか浪人とか全くしたことはありません。はつきりいって偏差値の高い学校でしたから、

出席簿をたたく。

小川原 留年、中退、そんなことする奴、僕の友だちにはいませんでした。

小川原、教室をゆつくり歩く。

小川原 びつくりしました。ここは定時制高校です。

小川原、そのまま退場。大池、小坂、向田を残して皆退場。

## 第二場 放課後

照明が変わる。

大池、小坂、向田を除く全員がその場にしゃがむ。

大池 ねえ。修学旅行、行く？

小坂 いかない。

向田 いかない。

大池 どうして。行こうよ。

小坂 なに。

向田 この学校、昼間の学校と違ってみんな行くってわけじゃないんだよ。

大池 うん。知ってる。

向田 だったらいいじゃん。特別なことじゃないんだから。

大池 でもそれはほんとに昼間の仕事休めない人とかいるからでしょ。

小坂 なに。

向田 だよ。

大池 行けるじゃん。小坂さんも向田さんも働いてないんだから。

小坂 なに。

向田 うるさいな。

小坂 まじうざい。

向田 いかない。

小坂 いくわけないじゃん。

大池 どうして。

小坂 私、お泊まりなんかしたことないから。

大池 どういうこと。

小坂 親戚のところに泊まったときなんかもそわそわして落ち着かない。

向田 そうなの。

小坂 うん。たいてい眠れない。

向田 わかる。

小坂 向田さんもそう？

向田 私違うけどわかる。

小坂 違うけどわかるの。

向田 うん。なんかね。でもたいていそうなんじゃない？

大池 なにが。

向田 こんな学校来てる子はさ。たいていさ。

大池 そうかな。

向田 中学校の修学旅行、行かなかった人。はい。(手を上げる)



小坂 はい。(大池も手を上げる)

向田 小学校の修学旅行、行ったけど一緒に歩いてくれる友達いなくてつまんなかった人。はい。(手を上げる)

大池 ……(手を上げる)

向田 あれ。小坂さんは。

小坂 私小学校も修学旅行行ってないし。

向田 あそうなんだ。

小坂 もうその時すでに学校もちよくちよく休んでたし。

向田 あそうなんだ。

小坂 行かない。無理だよ。怖いもん。

大池 怖くないよ。

小坂 もうすぐやめるし。

大池 え。そうなの。

小坂 やめるかもしれないし。

向田 「かもしれない」じゃん。

大池 やめたら就職とかもできないよ？

小坂 いい。

大池 また家に引きこもっちゃうんじゃないの？

小坂 いい。それで。親が死ぬまで家にいる。

大池 親が死ぬって。

向田 あと五十年くらいだよね。

大池 五十年もひきこもるの？

小坂 うん。

大池 六十七才とかになるよ。

小坂 うん。

間。

小坂 学校、やっぱりなじめないし。

向田 うん。

小坂 もうなんか無理なんだと思う。

向田 うん。

小坂 休み時間どうしていいかわからないし。

向田 うん。

小坂 そんなことない？

向田 ある。

間。

向田 で、でも、どうして？

小坂 うん？

向田 どうして急にそんな話なの。

大池 あ。私？

向田 普段そんなに話さないのに。

大池 ああ。いやだって。

小坂 同じにおいがするからね。

大池 え。

小坂 だから呼び止めてみたんだよね。

向田 そうか。

小坂 いつも休み時間じっとしてるじゃん。だれとも話さないでさ。ばらばらさ。同じにおいがするじゃん。

向田 そうだもんね。

小坂 大池さんが迷ってるんじゃないの？修学旅行。

大池 え。

小坂 学校つづけるかどうかも。

大池 え。

向田 そうなの？

間。

向田 仲良くなりたいたいと思ったの？

大池 ……

向田 私無理かも。つて思ってたらどうする？

大池 ……

小坂 私も無理かも。

大池 ……

間。

向田 人の呼吸が気になるんだよね。

小坂 なに。

向田 呼吸。息すったり、はいたり。

小坂 うん。

向田 自分のタイミングでできなくなるんだよね。隣で人が寝てるとき。

小坂 ああ、うんうん。

向田 じゃ彼氏のに合わせてするか、とかね。やって。あわせてみたりして、寝れるかなあって。でもあつとつう間に彼氏寝ちゃって。先に寝られるともうあと全然寝られなくなつて。ね。むかつくから帰つてもらうよつになつた。今。

小坂 え。

向田 うん。

小坂 彼氏いるの？

向田 あ。  
小坂 今。  
向田 いる。  
小坂 どんなの？  
向田 どんなつて。  
小坂 やさしい？  
向田 わからない。  
小坂 彼氏つて、どんなことするの？  
向田 どんなこと。  
小坂 うん。一緒にいるとき。  
向田 どんなことつて。  
小坂 うんうん。教えて。  
向田 普通だよ。  
小坂 普通つて。  
向田 普通つていたら普通でしょ。  
小坂 その普通が。  
大池 だよね。  
向田 なに。大池さんも。  
大池 うんうん。どんな感じ？彼氏つて。  
向田 うーん。だから。  
小坂 うん。  
向田 デートでしょ。  
小坂 どこか行くんだ。  
向田 いや、…行かないなあ。  
大池 そうなの。  
向田 はじめはね、行っただけ。映画とか。  
小坂 あ。やっぱり。  
向田 ボウリングとか。  
大池 やっぱり。  
向田 でも今はね。行かないなあ。  
小坂 部屋にいるんだ。  
向田 マンガ読んでる。  
大池 彼氏が？  
向田 で私は隣でゲームしたり。  
小坂 話しないで？  
向田 エッチしたり。  
小坂 ……エッチつてどう？  
向田 ……きもちいい。  
小坂 ……ほんと。

間。

小坂 私。

大池 うん。

小坂 好きな人はいる。

大池 あ、そう？

小坂 好きな人はいるよ？

向田 うんうん。

大池 だれ？

小坂 うん。

大池 ……うん。

小坂 ……椎名拵平。

大池 ……ああああ。

小坂 無口だから、あの人。

大池 ……ああああ。

向田 そうか。

小坂 一緒にカラオケいく。

向田 えうそ。

小坂 行くの？

大池 行くの？

小坂 そういう話でしょ。

大池 あそうか。

向田 あそうかじゃないよ。

大池 で。

小坂 歌うの。

大池 歌うの。

小坂 うそ。歌わない。

大池 歌わないんだ。

小坂 うーん。どっちにしよう。

向田 どっちでもいいよ。

大池 どうするの？

小坂 黙ってる。

大池 黙ってるの楽しい？

小坂 それでも分かり合っの。

大池 なにを。

小坂 気持ち。

大池 気持ち。

小坂 お互いの気持ち。

向田 なんじゃその話。

小坂 ゲームセンター。

大池 そんなとこ行くんだ。  
小坂 行く。  
大池 ゲームするんだ。  
小坂 わーとかきやあとか言う。  
大池 うそ。  
小坂 ほんと。  
大池 私苦手あいうとこ。  
小坂 私も苦手。  
向田 なんじゃそれ。  
小坂 でも彼も苦手なの。  
大池 あ、そうなんだ。  
小坂 奥のほうがバッティングセンターになっててそこに行つて。  
大池 ボール速いでしょ。打つ。  
小坂 打つよ。  
大池 打てるの。  
小坂 打てるよ。  
大池 打ったことあるの。  
小坂 打ったことないよ。  
向田 だったら打てないよ。  
小坂 交代ではいるんだよ。  
大池 一緒に入れないんだ。  
小坂 彼、意外となかなか当たらない。  
大池 うん。  
小坂 私も当たらない。  
向田 言つたとおりじゃん。  
大池 盛り上がるんだ。それでも。  
小坂 盛り上がらない。  
大池 そうなの。  
小坂 うろろろして。  
大池 うん。  
小坂 笑わない。  
大池 うん。  
小坂 あの人は笑わないんだよね。  
大池 うん。  
小坂 で、  
大池 うん。  
小坂 うろろろする。  
大池 うん。  
小坂 ……いいねえ。  
大池 いいねえ。

向田 そうかもしれないがね。  
小坂 それから。  
大池 うん。  
小坂 熊ノ下慶介さんが好き。  
大池 だれそれ。  
小坂 近所のファミレスのお兄さん。  
大池 ファミレス。  
小坂 すてき。  
大池 話したの。  
小坂 話してない。無口だから。  
向田 無口好きだね。  
大池 でも無口ってわかるの。  
小坂 わかる。熊ノ下慶介さんは無口。椅子に座るでしょ。熊ノ下慶介さんが来るでしょ。  
大池 うん。  
小坂 いらっしやいませ。ご注文は。……ね。  
向田 普通じゃん。  
小坂 でもほおーっとしてるんだよ。たいていは。  
向田 ファミレスのバイトだったらほおーっとしてられないでしょ。意外と忙しいんだよあれ。暇さえあれば裏に行って皿洗ったり。  
小坂 してない。  
大池 してないの。  
小坂 いつもサラダバーの横に立ってほおーっとしてる。仕事できないんだと思う。  
大池 どこがすてきな。  
小坂 まかないを店の中で食べるときも一人だもん。  
向田 食事が出るんだよね。バイトにもね。  
小坂 タバコふかしたり。一人で。  
大池 うん。  
小坂 一人で、ふおお……  
大池 ……ああああ。  
向田 ……共感しそこなうんだがね。  
大池 七人の小人の一番後ろにいる人。  
小坂 なに。  
大池 いつも眠そうな人。  
小坂 そんなのいる？  
大池 いるいる。眠そう。半目。ちよつとなで肩。  
小坂 そうなの。みんななで肩じゃないの？  
大池 違うよ。あれ七人みんな違うんだよ。  
小坂 そうだったんだ。  
向田 あのそれは好きな人、ってこと？  
大池 ティーシャツが長くなったような服。きいろーくて。

小坂 うん。細くて。帽子曲がってる。  
大池 うん。帽子曲がってるのはほかにも数人いる。  
小坂 すこい怒ってるおじいさんみたいな奴もいる。  
大池 そうだって。七人全部違っただって。  
小坂 うわあ。  
大池 カラオケ行く。  
小坂 半目の人？  
大池 いく。眠そうなの。いつも。  
小坂 ……ああああ。  
向田 ……少しわかるかな。  
小坂 名前あるのかな。半目の人。  
大池 ねむのすけ。  
向田 あれヨーロッパ人でしょ。  
小坂 ネムロン。  
向田 葉の名前じゃん。  
大池 睡眠薬。  
小坂 あほんとだ。  
大池 ミンミン。  
向田 餃子屋さんか。  
小坂 パンダじゃないんだから。  
向田 そんなパンダいないでしょ。  
大池 中国人か。  
向田 だからパンダだって。中国人じゃないって。  
小坂 ふふ。

間。

大池 ね。行こうよ。修学旅行。  
小坂 うん。考えとく。  
向田 うん。多分行かないけど。  
大池 うん。

#### 第四場 授業

ほかの皆、そろそろと教室に入場。  
小川原 急いで走ってくる。そして、気をつけ、礼。

小川原 「何者か、ヨーゼフ・Kを密告した者がいるに相違ない。というわけは、ある朝、身に覚えのない彼が突然逮捕されたからである。アパートの経営者であるフラウ・グルバハの女中、この女が毎朝八時には食事を運んでくることになっているのだが、今日に限って姿を見せない。これは、前例のないことだ。Kはしばらく待ち、枕に頭を埋めたまま、街路を隔てた向こう側に住んでいる老婆が、異様な好奇心の目を輝かせてこちらを凝視している様子を、見るともなく眺めていたが、落ち着かぬ気持ちと同時に空腹に襲われ、ベルを鳴らしたのである。とたんに、扉がノックされ、この下宿ではついぞ見かけたことのない男がひとり、入ってきた。」  
どうですか？

読むのではない。暗記しているのだ。

皆、反応がない。

小川原 どうですか？長島君。

長島 え。

小川原 どう。

長島 どうですか？なにかですか。

小川原 いや。きいてたろ。

長島 聞いてました。

小川原 どう。

長島 小説ですかそれ。

小川原 小説です。カフカ、という人の書いた小説です。

長島 先生、暗記してるんですかそれ。

小川原 暗記してます。「審判」という作品です。その第一ページです。

長島 それがすごいと思いました。

小川原 ドキドキします。

長島 は。

小川原 ドキドキしませんか？します。先生はしました。どうなるんだろう？これどうなるんだろう？ね？

長島 ええ。

小川原 小坂さん。

小坂 はい。

小川原 どう？

小坂 ええつと。

小川原 何者かが、ヨーゼフ・Kを密告したものがいるに相違ないんですよ？私たちは、常に、誰かに密告される可能性の中を生きています。違いますか？じゃそれは誰？誰でしたか？

小坂 ええつと。

小川原 それは突然ある朝、やってくるんです。逮捕されるんです。僕はこれだ！と思いました。われわれはこれだ！この感じだ！日々こんな不安の中を生きているのが、私たちが。ね？伴さん。

伴 ええつと。

小川原 学生の頃、僕はこの本に出会って、布団の中から出てこれなくなつて、たつた一日で読みきつてしまいました。なんだかそれから気が楽になつて。人生はずいぶん違ったものにみえました。僕はこの本を皆に読ん



でほしい。できれば布団の中で。できればたった一日で。ご飯も食べないで。学校なんか来ないで。ね。

伴 学校は、こないと。

小川原 なに？

伴 学校は来ないと卒業できません。

小川原 いいんです。違います。いいですか。学校はこの校舎だけじゃありません。すべてです。時には工場のほこりまみれの旋盤の前。時にはファミリーストランの湯気いっぱい厨房です。そして時には昼間起きる気になれなくてもぐりこんでしまっている布団の中なんです。ほかの先生には言うな。高山。

高山 はい。

小川原 今の、ほかの先生には言うな。でも僕は、本心ではそう思ってるんです。ここでみんなは何してるんだろう。ここで僕はみんなになにか教えてる。だけどそれはほんとなにか皆のためになることだろうか。じゃいつそ皆が今ほんとに必要としていることを。

津島 (くしゃみ。机に突っ伏して寝ていたのだ)

小川原 (話を止められて) この続きを、今から書いてもらおうと思います。

高山 え。

小川原 「とたんに、扉がノックされ、この下宿ではついぞ見かけたことのない男がひとり、入ってきた。」  
「こん、はい、がちやり、見かけたことのない男がひとり……さてどんな男だろう。皆が今、生活の中で、感じる不安や恐怖を、この先の物語にして作ってもらおうと思います。」

高山 どういうことですか。

小川原 自分を逮捕する男、どんな背格好で、どんな眉毛で、どんな黒い服を着てるのだろう。そこから書いてほしいんです。

伴 小説を書くんですか？

小川原 そうしたらみんなの抱えている不安や恐怖がはつきりします。敵の姿さえはつきりすれば、おびえることはない。そうやって自分の心を鍛えることこそ、はい。国語の勉強なんです。

長島 小説なんか読んだこともないのに。

小川原 大丈夫。みんなは書けます。皆の生きてきたほかの人とはひと味違う道の途中で、なにをどう感じているんだろう。それをきちんと追っかけるだけで、それがきつといい小説になると思うんだな。

津島以外の全員 ええー。

小川原 さあいこう。僕はみんなを尊敬しています。

津島以外の全員 ありえないって。

小川原 もちろんです。尊敬してます。

津島以外の全員 うそつけ。

小川原 さあ持とう。鉛筆を。

津島 (くしゃみ)

小川原 ……(小声で) みんな、うるさいよ。津島君が寝られないから。

津島以外の全員 ……(津島を取り囲み、覗き込む)

津島 突然起き上がる。

皆 あわてて教室の端まで避難する。

そして、静かに退場。

残る伴。

第五場 放課後

伴 うそ。

津島 うそじゃないって。

伴 どうしてわかるの。

津島 俺わかるんだよ。

伴 どうして？

津島 わかるの。俺。

伴 ええ。

津島 ……やつぱりへんかな。

伴 へんってどうか。

津島 へんなんだよね俺。

伴 いやへんっていうのじゃないけど。

津島 特別な能力っていうの？だいたいわかるよ。

伴 うそ。心の中に隠してることが。わかるんだ。

津島 あいつは今日いらいらしてる。

伴 うん。どうして。

津島 爪切ってこようと思っただのに切りそこなったから。

伴 そんなこと隠してるかな。

津島 つめ伸びてるからね。

伴 見たらわかるでしょ。

津島 こいつは今日むしゃくしゃしてる。

伴 どうして。

津島 朝髪の毛洗おうと思っただけどシャワー浴びそこなったから。

伴 そんなこと隠すかな。

津島 ちよっと肩にフケ積もってるからね。

伴 だからそれ特別な能力じゃないって。

津島 わかるんだって。心の中のちよっとしたことくらい。伴さんってだいたいき。俺の嫁さんに似てるからさ。

伴 だこが。

津島 頼りなくて。だこことなく。

伴 それってき。

津島 あ。こめん。そんなじゃないよ。

伴 そんなんって。

津島 なんか口説いてるみたいに聞こえた？だったらそんなんじゃないから。

伴 大丈夫。

津島 そう？

伴 なんともない人から言われてもなんともないから。

津島 なにそれ。ちよつと失礼。

伴 だいたいそんな余裕ないし今私。

津島 だよね。

伴 私さ。

津島 うん。どうするの。

伴 うん。

伴、歩く。教室の中を。一周。

津島 ……

伴 津島つちってやっぱりあれ？自分がお父さんだから？だからわかるの？

津島 そうかな。

伴 自分がお父さんになるってどんな感じだった？びっくりした？

津島 うん。びっくりした。

伴 うれしかった？

津島 うん。うれしかった。

伴 うそ。うれしくなんかなかったでしょ。

津島 うん。ごめん。うれしくなかった。

伴 だめだな。奥さんに言いつけるぞ。

津島 やめて。それはごめん。

伴 どうして？お父さんになるのに？

津島 だつてまだ十七だったし。俺まだその時やんちゃ盛りで。

伴 鑑別所とか？

津島 帰ってきたとこで。うれしくて。調子に乗って。

伴 でやっちゃったんだ。

津島 髪の毛こんなんじゃなかったんだよ？もうこんなんなって、二二んどこからこつ、

伴 すごいね。

津島 掃除機一個壊しましたか？っていうようなね。スプレーひと缶使い切りましたか？みたいなね。

伴 色とりどり。

津島 もうギンギンに、ギンギンで、ギンギン。

伴 うんうん。ギンギンだったんだ。

津島 とにかくギンギン。ガキなんかいるかって。

伴 信じられないね。

津島 なにが。

伴 津島つちが昔そんなんだったって。

津島 ギンギンだったんだよ？

伴 よくやめられたね。

津島 卒業した。なんかもうやりきった、って感じ。もうやることは全部やったからね。

伴 津島っちが。

津島 なんだよ。やったんだよ？ほら。……〔肩そびやかして歩く〕

伴 うん。

津島 怖いでしょ？

伴 いや怖くない。

津島 うそ。ほら。(机を蹴る) な？

伴 いたそうだし。

津島 痛くないよ。

伴 へえ。

津島 (座る)

伴 やっぱり痛いんだ。

津島 痛いけど。

伴 やっぱりあれ？お父さんになったから？な？な？な？からでしょ？

津島 関係ないって。卒業しようかな、と思ってた頃にガキができたから。

伴 ガキって似合わないなあ。

津島 なにがよ。どうしてよ。似合うわよ。

伴 わよって。

津島 ガキはガキだよ。

伴 かずくんかわいい？

津島 なにがだよ。

伴 かわいいんですよ。かずくん。かずきくん。いくつになったの？

津島 忘れたよ。

伴 またまた。

津島 わすれたつづの。(肩をそびやかして歩く。しばらく。そして、机を蹴る。座る。)六つ。

伴 六歳。

津島 と三ヶ月と四日。

伴 ものすごく詳しく覚えてるじゃん。

津島 しかたないよ。

伴 私さ。

伴、教室を歩く。

津島 ……

伴 きいて。津島っち。私さ。

津島 うん。

伴 きいて。きいて津島っち。私さ。

津島 うん。

伴 ……

そしてまた歩き出す。教室の中を。一周。

津島 うん。きいてるよ。きいてる。

伴 (止まって) 私、

津島 うん。

伴 ……ああ。

津島 もういいって。

伴 なにいいって。

津島 もうわかるって。

伴 なにがわかる。

津島 産みたいの。

伴 うそどうしてわかる。

津島 わかるよ。わかるでしょ。そんなたっぷりいろいろ歩いて。

伴 うそ。わかる？

津島 わかるって。

伴 だってえ……

伴、津島のひざにもたれる。

伴 産みたいと思う。認めてくれた。

津島 え。ほんと。

伴 違っよ。私を、認めてくれた人だから。

津島 うん。

伴 私ずっと思ってたのに。子どもなんか産まないかもしれない。誰も私なんか好きになってくれない。だけど、きつとうち貧乏だからね。お母さん自分が失敗してるから娘には絶対うまくやってほしいって思ってた。絶対

結婚しろって言うから。結婚はする。

津島 いいじゃん。

伴 好きでもない人と結婚しないといけない羽目になる。

津島 そんなのうまくいかないでしょ。

伴 好きっていうのとうまくいくっていうのは違っんだって。

津島 それお母さんが言うの？

伴 だから今、私好きな人の子ども産める、ラストチャンス。

津島 早いって。今いくつだよ。

伴 十九。

津島 全然ラストじゃないよ。

伴 でも好きなんだもん。

伴、津島のひざに顔をうずめる。

津島 どうやって育てるの。

伴 普通に。

津島 むこう、嫁さんいるんだろ。別れてくれるの。

伴 それは無理。

津島 じゃどうするの。

伴 一人で育てる。

津島 普通かそれ。

伴 いまどき普通。

津島 大変だよ。夜泣くし、一人でなんて世話できないよ。

伴 やっぱ津島っち世話してるんだ。

津島 ガキは泣くんだよ。

伴 いいかげんなおやじ。ただのバイト先の店長。ふつうのすけべなおじさん。こっちは純愛だよ。

津島 だめだよ。

伴 でも奪いたい、つてことじゃないんだよ。ただ好き。私うれしい。(顔をあげて) 目を見てほめてくれる。

津島 それがそんなにいいの。

伴 いい。とける。「笑顔がいいねえ」「お客さんが喜んでるよ」「ファンがいるよ」。ファンなんかいないって。

知ってる。でも上手に皆に言ってる。皆に言ってるのは知ってたのに、私。目を見てもらうのが好きで、見て

もらってるうちに、見てもらいたいと思ってる。思うようになって。見てもらいたい。じっと見てたら目が合う

ようになつて。(津島のひきか顔をつめ)

津島 うん。

伴 奥さんがいるのは関係ない。

津島 うん。

伴 奥さんがいるのは苦しい。

津島 立つ。うんこずわりしてタバコをふかす指のうき。

伴 禁煙してるくせに。

津島 ガキがき。

伴 子どものためだったらやめられるもんね。

津島 産むって言うの。

伴 誰に。

津島 そいつに。

伴 言わない。

津島 どうするの。

伴 消える。

津島 言わないで消えるの。

伴 下ろせって言われたら悲しいし。

津島 (立) うひー。

伴 かわいい。津島っち。

津島 どこがだよ。

ウンコすわりに戻る。

伴 怖くないよ。

津島 (立っ) ええ。でもでも。

津島、混乱して一周する。

津島 (止まって) いやいや。でもでも。

伴 赤ちゃんできたの私だよ。津島っちじゃないんだよ。落ち着いて。

津島 子どもはね。でも子どもはね。

伴 かわいいんだよ。

津島 ン。そりゃちよつとは。

伴 ちがうよ。彼。かわいいんだって。

津島 子どもいるんだ。

伴 ちがうの。いないんだけど。好きなんだって。

津島 じゃいいじゃないか！産もうよ！いやなに言ってるんだよ。だめだよ。下ろせよ。いや下ろせなんて言うていいのか。だめだよ。赤ちゃんなのに。産めよ。産めよ。産め、っていつていいのか。いや言えない。言うの？言うな。じゃ下ろせ。だめだよ！なんて言えるの？言います？言えない。ああ！俺ってはか？

伴 うん。そんな感じ。

津島 誰。

伴 彼。そんな感じになると思う。言ったら。

津島 馬鹿だ。

伴 かわいいよ。

津島 馬鹿っていうの。

伴 でも殴る。

津島 殴るの？伴さんを。

伴 殴る。

津島 子ども好きなくせに。

伴 ほら。ここ。(襟首をあげてみせる)

津島 え。(のぞきこむ)

伴 ね。

津島 うわちよつと。

伴 ン。

津島 ……びっくりした。

伴 赤くなつた。

津島 なつてない！

伴 ごめんごめん。びっくりしたね。

津島 なんだよそいつ！

伴 繊細な人なんだって。

津島 許せない。

伴 ん。

津島 俺、許せない。もう！もう！もう！（その場でジャンプを繰り返す）

伴 だから津島っち。私だって。赤ちゃんは。

津島 殴りにいく。

伴 え。

津島 殴りにいく。俺殴りにいく。

伴 だめだよ。

津島 どうして。だめだよそんな奴。会社の前で待ち伏せしてチェーンで一発、総入れ歯にしてやる！もう！

（その場でジャンプを繰り返す）

伴 やめてよ。もう少年院じゃないんだよ。もう刑務所になっちゃうよ。

津島 うう。

伴 （津島のひざを手でおさえて）ありがとう。

津島 下ろすお金あるの？

伴 下ろさないって。

津島 でも下ろすお金あるの？

伴 ない。

津島 俺出す。

伴 出すな。

津島 出す。

伴 なくせに。

津島 ないけど。ためる。

伴 今いるのに。

津島 下ろすんだ。

伴 おろさん。

津島 産むの。

伴 どうしよう……

間。十秒。

津島、伴を包み込むように抱きしめる。かわいいぞう、いとoshii。感情が混じったのだ。

三秒。

その自分に驚いて、津島 とびのく。

津島 うわ。びっくりした。

伴 恋愛感情あるの？

津島 誰に。

伴 私に。

津島 ない。

伴 ほんと？

津島 ほんと。



伴 だったらほつといて。

津島 いや。だめ。

伴 どうするの。

津島 苦しいでしょ？だから聞いてあげる。

伴 聞いてどうするの。

津島 どうするんだらう俺。

悩んで激しく踊るようなことになる津島。

津島 ああ。なに踊ってるんだろ。馬鹿だ俺。

机の上にあぐらをかいて。

津島 ……どうしてこんなに気になるんだらう。ほつといたらいいのに。

伴 ねえ。

津島 俺のことすき。

伴 いやどうしてそうなるの。

津島 あれ？どうしてこうなるんだろ。俺よめさんのことがすき。ガキすき。でもなんだか伴さんのことも好き。

伴 へ？

津島 伴さんのことが好きになってきた！

伴 へ？へ？

津島 あれええ？

伴 津島っち。

津島 てことかな……

津島 伴を恐れて目を見開いてみている。あとすき。まるで恐ろしい怪物に襲われかけているようだ。

津島 あれええ？

津島 伴を指さす。

伴 ありがとう。

津島 なに？

伴 でもそれ違うよ。

津島 違うの。

伴 津島っちがお父さんだったらよかったね。

伴、おなかをさする。

いざいざいさする津島。

場面転換。

## 第六場 授業

皆がぞろぞろと入場。あわてて小川原が入場。

「審判」を読んで聞かせる。大きな身振り手振り、情熱的だ。

小川原 『なるほど』と男は言い、『私は今君を尋問する義務もないわけだが、』「ここでもまた不平の声が起こり、しかし男はそれを制しておいて話を続けたので、今度は中途半端でやんだが、『今日は特に尋問を行うことにする。こんな遅参を二度と繰り返させぬ懲らしめだ。さあ、あがりたまえ！』誰か一人演壇から飛び降りたので、余裕ができ、Kはそこへ上った。テーブルにぎゅうぎゅう押し付けられる。うしろから猛烈に推してくるので、頑張っていないと、予審判事のテーブル、ついでに予審判事自身も一緒に、縁談から突き落としてしまえぞうだ。」

津島 (くしゃみ)

高山 ……先生、声が大きすぎます。

小川原 すまんすまん。

皆 先生の机の周りに集まる。

小川原 (小さな声で) 「予審判事はしかしこれをたいして苦にもしていない様子で、肘掛け椅子にゆったり座り込み、後ろの男にひと言言って雑談を終わると、」

津島、突然起き上がる。皆、気づいてそちらを見る。

皆、退場。

小川原と大池が残る。

## 第七場 放課後

大池、小川原だけが舞台に残る。ほかの人はその場にしゃがむ。

小川原 返してくれ。

大池 捨てた。

小川原 ほんとか。

大池 ほんと。

小川原 ……じやいい。帰っていいよ。(丟りかけ)

大池 捨ててない。

小川原 どこにもってるの。

大池 家にある。

小川原 家のどこ。

大池 机の引き出し。

小川原 返してくれ。

大池 返さない。

小川原 どうして。

大池 どうしても。

小川原 あれ結婚指輪なんだよ。先生の。再来週結婚式やるんだよ。けっこうするの。値段。返して。

大池 どうして結婚なんかするの。

小川原 どうしてって。するんだよ。

大池 先生結婚するのはへんだ。

小川原 どうして。するさ。

大池 へん。

小川原 へんなことないよ。大人は大人になったらするんだよ。

大池 うん。

小川原 普通だろ。たいていの大人は結婚するだろ。してるだろ。大池のお父さん結婚してるだろ。おまえのお

母さんも。普通だろ。

大池 うん。

小川原 ほら普通だろ。

大池 でもへん。やっぱり先生はへん。先生はへんだもん。

小川原 なんだよそれ。(丟りかける)

大池 先生、私と結婚して。

小川原 ええ？

大池 結婚して。

【小川原 私女です。

大池 うん。でもできるよ。オランダとか行ったらできる。】

小川原 おまえいくつだよ。

大池 十六歳。

小川原 先生いくつだよ。

大池 三十七歳。

小川原 ……(丟りかける)

大池 できる。できるよ。

小川原 未成年者は両親の同意がなければ婚姻できません。

大池 だめだめだめ。結婚しないとだめ。(ひきとめる)

小川原 じゃ再来週、先生いつたん結婚する。な。それで、おまえが二丁威になったらな。別れる。それでおまえと結婚する。するから。(痛りかけ)

大池 ……(泣く)

小川原 どうした。

大池 ……(泣く)

小川原 どうしたの。

大池 泣いてる。

小川原 見りやわかるって。

大池 子ども扱い。

小川原 そりやだって。子どもだろう。

大池 (白紙をかばんから取り出す) 約束して。契約書書いて。

小川原 契約書？

大池 結婚します、って契約書。

小川原 書かない。

大池 ……(泣く)

小川原 (書く) はい。

大池 ……(見て) はんこ。

小川原 もってない。

大池 ……(泣く)

小川原 はいはい。(胸の赤ペンで親指の腹を塗りたくり、紙に押す) はい。(渡す)

大池 約束破ったら裁判所もって行く。

小川原 はいはい。(ティッシュで指を拭きながら去りかけ)

大池 本気だよ私。賠償請求するよ。民事裁判所って言うんだよね。裁判所の隣の建物に弁護士会の事務所って

いうのがあって毎週月水金は午前中二時間だけ無料法律相談やってるんだよ。

小川原 おまえ。

大池 バイバイ。

小川原 うん。

大池 バイバイ。

小川原 ……

大池 帰らないの。

小川原 帰れないだろ。

大池 ヒヒ。書いたもんね。

小川原 返せ。

大池 どうして。

二人、とりあう。

大池、取り上げる。

大池 ああ。

小川原 ……(大池を見ながら、二つに破く。)

大池 ……(泣く)

小川原 おまえな。無理でしょ。先生結婚するのに。

大池 キスした。

小川原 え。

大池 先生キスした。

小川原 え。なに。

大池 先生キスした。私にキスした。

小川原 してない。

大池 したよ。

小川原 してないよ。

大池 したした。したよ。

小川原 ああ。(紙を手に行っているノートから取り出す、書く、ほんこを指で押す)どう？

大池 わーい。(取ろうとする)

小川原 (渡そうとしない)

大池 (取ろうとする)

小川原 (渡そうとしない)

ふたり、もみあう。

小川原 ああ。ああ。もう。

大池 いい。そんな紙切れいらぬ。

小川原 そうなの。

大池 先生私と約束して。ほんとに結婚して。再来週結婚しないで。私ほんとの約束がいい。そっちのほうがいい。

小川原 あのね。

大池 うん。

小川原 二十一も離れてるとね。すぐおじいちゃんだよ。俺はげるよ。【おはあちゃんだよ。私ふよふだよ。】子ども産めないよ。先に死ぬよ。

大池 いい。そんなの全然いい。不可能じゃないもん。そんなのやってる人世界中に何万人もいるよ。

小川原 いるのか。

大池 いる。

小川原 知ってるのか。

大池 知らない。でも絶対いる。常識じゃん。普通に考えたらいるでしょ。そんなの当然でしょ。(小川原に近づく。キスを迫るのだ)

小川原 (その手を捕まえて) 怒るぞ。いいかげんに。

大池 キスして。

小川原 返せ。指輪を。むちゃくちゃ言うな。

大池 むちゃくちゃなんか言ってる。

小川原 ふざけるのもいい加減にしろ。もううちに帰れ。遅いんだから。

大池 ふざけてなんかいない。先生いつも言ってるじゃん。みんなを励ましてるじゃん。ほんとの気持ちを大切に

にしろ、へこたれずにあきらめないで前に進め、

小川原 そういうのとこういうのと次元が違うのだろ。

大池 次元が違うってなんのこと。私頭悪いからわからない。

小川原 お父さんがいないからだよ。さみしいだよ大池は。わかるから。聞いてあげるから。話はいつでも聞いてやる。悩みがあったら聞いてやる。卒業しても訪ねてきたらいい。そんな卒業生、いくらでもいる。だけどお父さんの代わりにはなれないんだよ。お父さんはお父さんだから。先生は先生だから。お父さんはおまえの心の中にいるんだよ。いないんだったら育てるんだよ。大丈夫。育つよ。おまえが生まれて、育てきたってことが、おまえが愛されて、大事にされたってことの証拠なんだから。自信もって。自信もって進もう。な。そうしたら、きつと大池はきれいになる。今よりずっときれいになる。そしたらできるよ。こんな、おじさんじゃなくて、もつと立派な、もつとかつこいい、もつとやせた、すてきな大事な人が。そしたらその時ほんとにお父さんの代わりじゃなくて、好き、大好き、愛してる、結婚して、って気持ちになるから。な。な。な。それまで辛抱しよう。今辛抱したらその分その先やってくる幸せはな、確実に大きいから。な。な。な。

大池 (突然はつきりしがみつく)

小川原 ちょっとまで。なんだこの。離せ。離せ。離せ。

大池 (急に離れて) ……

小川原 ……

大池 臆病者。

小川原 なんだ。

大池 女子高生とセックス。

小川原 うえ。なんだ。

大池 怖いんですよ。ほんとほしたいんですよ。

小川原 うえ。ばか。勘弁してちょよ。

大池 自信がないから。自分に自信がないから。そういう小川原のほうこそ自信がないから。でも大丈夫。こんなに愛されて。こんなに好かれてるのに。ずるい。

小川原 え？

大池 ずるい。ずるいずるいずるい。

小川原 え？え？え？

大池 ……安全なところに行つて。気持ちにうそついてる。

小川原 ん？

大池 私を私として見てる？見てる？

小川原 見てるよ。もちろん見てるよ。

大池 大池日向子。おおいけ、ひなこ。

小川原 そうだよ。大池だよ。大池日向子だよ。そこにいるのは大池日向子だよ。

大池 うそ。違つよ。違つよ。私は生徒。大池じゃなくて生徒。私を生徒としてみてるでしょ。

小川原 そりやそうだよ。

大池 はじめから私にチャンスはないの？ ないじゃん。不公平じゃん。気持ちのまま？ 好きになつちやいけないってこと？ 好きな人ができたのに、好きな人のことがとても大好きなのにその人のことを好きになつちやいけないってどういうこと？ うそばつかり。いつもそう。そのままじゃだめって。ほんとのことはだめって。うそばつかりつって。学校っていつもそう。そうじゃん。

小川原 あの……

大池 (抱きつく) 結婚してないじゃん。来年十六歳じゃん。結婚できるじゃん。

小川原 (はがそうとして)

大池 (いつそう強くしがみつき) ほんとに好きなの？その人のこと？こんなに私好きなのに。私こんなに好きだ。夢に出てくるよ。毎晩。昨日はトナカイだったよ。

小川原 なんだよトナカイって。

大池 先生トナカイで。私サントラで。プレゼント配って。

小川原 俺トナカイ？ 大池かっこいいじゃないか。

大池 鼻赤いんだよ。かわいい。

小川原 俺そりひくだけじゃないか。

大池 小さい子が喜んでたよ。

小川原 なんだよその夢。

大池 トナカイさんとサントラさん、仲良しだね。って言ったよ。子どもたち。

小川原 仲良しじゃないか。恋人じゃないじゃないか。

大池 音楽。

小川原 なんだよ。

大池 忘れない。一生思い出す。サザンオールスターズ。小川原の好きな歌は私の好きな歌になった。

小川原 歌ってなに。

大池 (踊って歌う) 今何時？ そうねだいたいねえ。

小川原 俺そんな歌好きなの？

大池 私がこんな歌好きなの？ 知ってると思う？ こんな歌。古臭い歌。いまどきの若い子、だれも知らないよ。

小川原 サザンを馬鹿にするな。永遠の青春ソングだぞ。

大池 やっぱすきなんじゃん。

小川原 あ。しまった。

大池 すきすきすき。好きすぎて眠れない。

小川原 さつきさつき夢に見るって言ったじゃないか。

大池 におい。

小川原 におい？

大池 墨のにおい。墨汁。忘れない。もうここからはなれない。

小川原 それ俺のにおいか。

大池 墨汁買ってきてふた開けとく。部屋じゅうが墨汁のにおい。

小川原 ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。

大池、離れる。小川原、机を真ん中に一個動かす。

大池 はい。

小川原、椅子をその上に一個のせ。

小川原 椅子は、

大池 はい。

小川原 椅子です。

大池 だよ(ね)

小川原 机は、

大池 はい。

小川原 机でしょ。

大池 そりゃそう(だよね)

小川原 机は、椅子と結婚するか。

大池 は？

小川原 するか。しないだろ。するか。しないだろ。しないんだよ。机は、机だから。椅子は、椅子だから。だろ？

大池 椅子は椅子とも結婚しない。

小川原 ん。

大池 机は机とも結婚しない。だいたいこんなの生きてないし。こんなの。(ける)こんなの。(ける)こんなの。

こんなの。こんなの。

小川原 やめなさい。やめなさい。(机と椅子をかばう。ふたり、しばらく追いかけあいつこのようになる)学校の備品なんだから。やめなさい。

大池 ……備品じゃん。学校の。

小川原 ……(そして片付ける。元通りに)

大池 備品じゃん。学校の。

小川原 そうだ。

大池 備品じゃん。学校の。

小川原 そうだ。そうだ。そうだ。

照明が変化する。

## 第八場 休み時間

生徒の皆が入ってくる。

小川原 退場。先頭きって津島がしゃべっている。

津島 だから、歌つくったんだって。なあ。

伴 うん。

高山 歌ってなに。

津島 だから、プレゼントでしょ。なあ。



伴 うん。

長島 プレゼント。

津島 忘れるなよ。小川原先生に誕生日プレゼントあげようって言うってたじゃん。

高山 うわあ。すごい。

津島 なあ。

伴 うん。

津島 なあ。

伴 うん。

長島 伴さんと一緒には？

伴 ううん。私は横で応援してただけ。

長島 なにさつきからうなづいてたくせに。

伴 ごめん。

津島 じゃ歌います。

長島 え。今から。

津島 そうだよ。歌うんだよ。

高山 わあー。(拍手)

長島 ちよつとおまえ。うるさい。

津島 いちにい、さん、の、

長島 自分で歌うのにいらんだろそれ。

高山 誰に合図出してるの。

津島 伴さんも歌うんだよ。な。

伴 ええ。

高山 伴さんがうなづかない。

長島 伴さん「ええ」っていったぞ。

伴 あ。ごめん。

津島 なに伴さん。頼むよ。

伴 あ。ごめん。

津島 ハモリも用意したじゃん。

伴 あ。ごめん。

長島 津島っち嫌がつてるのを無理やり。

津島 嫌がつてないよ。伴さんは嫌がつてない。な。

伴 (歌う) 学校がきらいなの

高山 いきなり歌いだしたよ。

伴・津島 (歌う) 彼女がつぶやくの

長島 うわちよつとほずかし。

小坂 黙って聞こうよ。

長島 うわ。なに。

伴・津島 僕もうなづきたいの

でも黙ってみているの

あの夜君は笑わなかった

あの夜だけじゃなく 笑わなかった

前の冬も その前の冬も その前の前の前の前の

笑おうとも思わなかった

下駄箱は茶色いニスの色

黒板は黒くなくて緑色

蛍光灯はまたたいて黄色

ほんとの色なんてここになかった

うまれた 見た ほんとの色

英語の先生がチョークを折って

君が見せた歯の白い色

白い色 白い色

学校の白い色

高山 わあー……

津島 (目をぬぐう)

長島 自分で泣いてるよ。

高山 いい。それいい。

長島 ええ。ちよつとそれをなに。みんなで歌うの。

高山 伴さんすごいー。

伴 そんなことないよ。

高山 いやいやすごいすごい。

伴 そんなことないって。

津島 あの、俺作ったんだけど。

高山 津島つちもすごいすごいー。

津島 あの、「も」じゃないんだけど。

大池 (立つ。教室のうしろへ。)

向田 なに。

大池 ……そうかな。

向田 なにが。

大池 そんなの歌えるかな。

向田 え。

大池 みんなで歌えるのかな。

皆 こおりついたようにそこにいる。

長島、唐突に早足で歩き始める。高山、それを追う。皆、しばらくそれを見ている。

皆、退場。

舞台の上をぐるぐる回る長島、高山。

第九場 放課後

照明が変わる。

長島 だめ。

高山 だめじゃない。

長島 だめ。

高山 だめじゃない。

長島 だめだめだめだめ。

高山 だめじゃないだめじゃないだめじゃないだめじゃない。

長島 だめなんだって。もう。

長島、高山から離れて、しゃがむ。

長島 もう俺なんか。

高山 ……

長島 もう俺なんか全然だめなんだって。

高山 ……

長島 こんな立派そうな口きいててもき。全然だめなんだって。だめだめなんだって。

高山 ……

長島 あれ。

高山 うん。

長島 なあ。

高山 うん。

長島 なあなあ。

高山 もう。

長島 追っかけてこないの。なあ。なあ。なあ。

高山 もうあきれる。あきれた。

長島 え。あきれたって。

高山 長島おまえいくつ？

長島 えいくつって。

高山 年齢。いくつだって。

長島 十八。

高山 十八って言ったら昔だったらちよんまげだぞ？

長島 言ってる意味がわからんぞ。

高山 ちよんまげだって。りっぱな。こんな。も「おつてきててへん」ってん。

長島 俺ちよんまげ？それって悪口？

高山 違うよ。ちよんまげだぞ？すこんだぞ？

長島 ほめてるんだ。それは。ちよんまげを。

高山 当然だ！

長島 当然かなあ。世間的には。それは。

高山 いくつだよおまえ。

長島 十八だって。

高山 昔だったらちよんまげだって。

長島 だから意味が。伝わってこないんだって。それ説教してるの？

高山 大人だって。違う？

長島 あ。大人って言うことか。ちよんまげは。

高山 大人だろ。ちよんまげは。

長島 大人なのか。ちよんまげは。

高山 大人だよ。ちよんまげは。こんな、もこおつてきてぐいっときて。

長島 それがだから大人ってこと理由？

高山 子どもはちよんまげしないんだよ。大人だけがするんだよちよんまげ。

長島 そういうことか。

高山 すねてる。バカ。ドアホ。腰抜け。ふぬけ。

長島 ちよつと。

高山 なんだよボケナス。

長島 ちよつと高山。

高山 なんだよくされチンポ。三回死んでこいウンコたれションベンたれ。

長島 あのさあ。俺書道展に出品しないからってそんなに言われないと、(立つ)

高山 (その手を引っ張り、目の前に立たせる)

長島 なに。

高山 あのさ。

長島 なんだよ。

高山 大丈夫だから。

長島 なに。

高山 大丈夫。長島、力あるから。

長島 …… (高山から離れる) なにが力だよ。

高山 (おつて正面にまわり) 県大会じゃ敵なしなんだよ私たちの書道部。

長島 …… (高山から離れる) だいたい書道部ってまじめにやっているとところが少ないし。

高山 (おつて正面にまわり) 定時制の書道部が昼間の書道部に勝つてことはさ。もう今やすこいことなんだよ。

長島 …… (高山から離れる) 部長の高山が草書の部で優秀賞楷書の部でも最優秀賞、つてそういうのにおんぶにだっこしてるだけ。

高山 パフォーマンスの部では長島めだつてるじゃん。高山がいくら一生懸命かいてもなんていうのあの長島のタレント性っていうの？華があるっていうの？きらっと光って人の目をひきつけてしまうそういう生まれもつての魅力っていうの？

長島 字じゃないじゃん。それ字じゃないじゃん。

高山 スターだよ？他校の女子から注目の的。

長島 笑われてるだけです。

高山 あこがれです。ファンレターもらったくせに。

長島 男が珍しいから。書道の女フスで地味だから男だったら誰でもよくて。

高山 違います。私相談されるよ。他校の子から。

長島 俺の得意技パフォーマンスしてそれ字じゃないじゃん。俺書道してるのに。字かいてるのに。字ほめられたい。字ほめてほしい。

高山 字だつてうまくできてるから賞もらえるんだよ。

長島 こんなでっかい筆持たされてさ。こんなでっかい半紙の上をさ。走り回ってるだけじゃん。

高山 音楽のリズムに乗ってるじゃん。

長島 乗ってるっていわない。逆らってる。音楽のリズムに逆らって苦しげに。

高山 筆重いかから多少もがくって。

長島 顔真つ黒にしてその顔がおもしろいから笑われて。

高山 だつてしかたないじゃん。長島どうやったらそんな汚れるのってくらい顔汚すし。

長島 おまえも笑ってる。

高山 私笑わないよ。

長島 笑ってる。笑った。この前文化祭のパフォーマンスで。

高山 笑ってない。

長島 一緒にやってるのに。一緒に書いているのに「あ」って「う」。時々「あ」って聞こえる。こっちはかぶ。こっちはから。こっちの方角から。

高山 お客様でしょ。

長島 ちかーいところから。約一米ートル四十センチくらいのちかーい距離から。

高山 私です。はいはい私です。私です。

長島 ほらみるほらみる。

高山 でも違います。あれは違います。

長島 じゃんなんだよ「あ」「てなんだよ」「あ」「てなんだ。」

高山 おなら。

長島 なに。

高山 おならこいてました。

長島 なんだって？

高山 ごめんなさい。私おならこいてました。

長島 そんなわけないだろ。

高山 そんなわけあります。力入るじゃん。はいつくばってるじゃん。それで走り回るじゃん。「こいてください

よ」って姿勢じゃん。でちやうの。「こいちやうの。」

長島 おまえいいかげんな

高山 辛抱しようってね。そりゃ普通だつたら思うの。思うよ。だつて女の子ですから。だけども。これが恐ろしい。書道って恐ろしい。どうでもよくなるもんね。どうでもよくなるない？ああ、今ここにめる半紙がにく

い。白い紙がにくい。私の持つこの重い筆のこの重さと硬さとくたばれ白いカミー……って」。

長島 へこぎ女。

高山 長島だってこいてるんだよ？気づいてないだけだよ？  
長島 俺はこいてません。  
高山 途中から誰も笑わなくなるじゃん。  
長島 そうかな。  
高山 そうだよ。すごい顔がものすごい顔になってそのうちそれがもうますますものすごいものすごい顔になつて、笑えない。場内迫力に打たれちゃって。すごいじゃん長島。すごいんだよ長島。四番サード長島。  
長島 なんだよそれ。  
高山 わかんない。  
長島 もがいてるって言った。  
高山 誰が。  
長島 審査員が。  
高山 言ったか？  
長島 言ったよ。みたことないって。言った。(物まね。長いひげ)「苦しみもだえ音楽に苦しめられ隅に苦しめられ紙に苦しめられ文字に苦しめられるようなパフォーマンス、私は驚きました。」  
高山 それが感動なんだよね。  
長島 つかい字書かせときや誰だつてばてるって。疲れるって。最後やけくそになって暴れるよ。俺字かいてるつもりもないもん。最後暴れてるだけでも。  
高山 すこいじゃん。書道なのに。暴れるだけみたいな境地に達する書道家、ちよつとじゃないよ？  
長島 小川原先生の気合に乘せられてやってたらさ。そうなるって。誰だつてすごいことになるって。  
高山 小川原だけじゃないって長島もすごいからだつて。  
長島 気合だけじゃダメなんだよ。字がうまくなけりやそんなの書道じゃないって。  
高山 だから字だつて稽古してるんじゃん。長島すごい稽古量じゃん。  
長島 なのに全然うまくならない。ならないもん。  
高山 全国で勝とうよ！  
長島 ……  
高山 な。勝とうよ。  
長島 ……  
高山 長島。全国で勝とう？全国で一番になるろう？  
長島 ……  
高山 約束したじゃん。誓ったじゃん合宿で。小川原先生と。私と。今年こそ。去年逃した優勝を、今年こそ。定時制が、全国で勝とう。  
長島 ……  
高山 なんでも中途半端だったんでしょ長島。だけど定時制だけ続いでて。書道のおかげなんでしょ？  
長島 俺書道しに来てるから学校。授業、じゃないから。  
高山 ほら長島あ。(背をたたく)  
長島 ……  
高山 長島あ。(背をたたく)  
長島 ……  
高山 四番サード長島あ。(背をたたく)  
長島 だからそれなんだつて。

高山 長島長島長島あ。(背をたたく)  
長島 だめなんだって。俺もう出展しないんだって。  
高山 ……書道展のバイト？  
長島 そんなんじゃないけど。  
高山 新聞社の主催の書道展のバイト。  
長島 そんなじゃないけど。  
高山 新聞社の主催の書道展のバイト、そんなにひどかったんだ。  
長島 おまえも一回見たらわかるって。ひどいって。  
高山 うん。  
長島 先輩に紹介されていってき。らくだからって。お金がいいからって。  
高山 らくじゃなかったの。  
長島 らくだった。  
高山 お金よくなかったの。  
長島 お金よかった。  
高山 なんだよ。  
長島 七日間で。女子大の書道部のお姉さんたちとかも来てて。バイトで。  
高山 それがブスばつかで。  
長島 別嬪さんもいた。  
高山 性格ブスで。  
長島 やさしくて楽しい人だった。  
高山 なんだよ。怒るぞ。  
長島 新聞社の名前が入った टीシャツ 着て。オレンジ色の。  
高山 ださいんだ。  
長島 意外とかわいい。  
高山 くさいんだ。前の人の使い古しで。  
長島 前の人女子大生だったのかな。いいにおいがした。  
高山 なんだよ。殺すぞ。  
長島 休憩時間お茶飲むんだよ。  
高山 おいしいのか。  
長島 きちんとおいしい。お菓子も食べる。  
高山 これもおいしいのか。  
長島 和菓子のわりといい奴。  
高山 だから殺すぞ。  
長島 すんごい量なんだよ。応募作品。おまえびつくりするよ。あっちの倉庫に前衛の部。こっちの倉庫に漢文の部。もうなにそれ。木箱。ばさばさあ。って。コンサートか！ってでっかい見たことないようなトラックがまたそこに来る。  
高山 運ぶんだ。長島たちが。  
長島 運ぶ。すごい量。  
高山 乱暴に扱うんだ。  
長島 ううん。ひとりひとつ。わりと丁寧に運ぶ。

高山 だったらいいじゃん。

長島 作業を指図する人がいて。

高山 おっさんだ。

長島 うん。おじさん。

高山 そいつが乱暴な奴だ。

長島 ううん。丁寧な人。いかにも書道みたいな。

高山 いいじゃん。

長島 なん往復もしたなあ。

高山 疲れるんだ。

長島 うん。半分外だし。寒いし。

高山 それがいやなんだ。

長島 でも動いてると身体あつたまつていい感じ。

高山 だからなにがいやだったのって。

長島 審査員が来るの。そのうち。倉庫でやる。倉庫の中で審査が始まる。部門担当が五人、おっさん。おっさんだよ。五人だよ。

高山 うん。おっさんはわかったよ。

長島 倉庫の中赤いじゅうたんなんかないんだよ。コンクリートの打ちっぱなしみたいなところでやるんだよ。

審査員はおっさん。普通の服着てる。和服、とか紋付はかま、とかじゃない。普通のおっさんセーター。おっさんズボン。おっさん。五人。おっさんだよ。

高山 おっさんはわかったって。

長島 順番にいくの。「はい次。」っていうとこうやって俺たちが高いところに掲げてかに歩きして、みせて、「はい次。」っていうとさつきと端っこまで行って片付けて、次のバイトが次のもってくる。「曲がつてる。右ちよつと上。」「戻ってきて。「前見えな。こうやってるからね。バイトは列作って待ってる。「はい次。」「ちよつと待って。あいいや次。」「はい次。」「はい次。」「はい次。」「はい次。」「はい次。」「はい次。」「はい次。」「

高山 わかった次、次、って行くんだな。

長島 素通りのときもあるけど「待て」って止められる時もある。置く場所が違うのがきつと二次予選進出。す

ごい多かった。次の午前中まであれ、かかった。でもね。わずか三秒。

高山 なにが。

長島 平均すると見てるの三秒。三秒だよ。

高山 うん。うん。

長島 俺のも三秒だ、とか思った。三秒。はい次。三秒。はい次。結局三秒、結局はい次なんだよ。もうあんなの見たらかけない。怖くて書けませんー！ー！ー！。

長島、机と椅子をくみ上げて高い砦を作ってその後ろに隠れる。

長島 怖くて書けません。

高山 「へへへ」

長島 ……

高山 長島、「へへへ」。

長島 ……



高山 長島、くじらって書いたよね。小川原先生、書いてくれたよね。

長島 くじら。

高山 書道部入れって。体育館に二人で連れ込まれて。字なんか書いたことないって言ったら書道は字なんか書くんじゃないんだって。見とけて。ぼっぱっぱあ、って上半身ぬいではだしになって、うわうわって見てる間に大きな筆で見たことないくらい大きな筆で、「くじら」って書いた。感動した。

長島 なんで「くじら」だ？

高山 昨日飲み屋で食ったから。一番大きい哺乳類だからって。大きいのがいいのだったら「中国大陸」とか

「ユーラシア大陸」とか書けて。くじらって意外と小さいって。「オーストラリア大陸」だろ。「アンデス山脈」だろ。

長島 「三崎半島」とか。

高山 なにそれ。

長島 大きいんだよ。俺自転車で回った。

高山 小さいだろ。

長島 小さいんだよ。だからああいうふうに扱われるんだよ。

高山 またへこたれる。

長島 なに。

高山 またへこたれるんだ長島。またへこたれるんだ私たち。まただ。またこんなつまらないことでつまついて。またこんなくだらないことでくじけて。仲間がくじけていなくなったら一人じゃ元気でないから結局やめる。いなくなる。ここにいない私。この世にいない私。どこにもいない私。

長島 え。

高山 ……

間。

高山 耳かかない。

長島 なに。

高山 私一生耳かかない。きめた。

長島 え、なにそれ。

高山 私決めたからね。

長島 おまえ。

高山 うん。

長島 おまえほんとにいいの。

高山 うん。いい。

長島 おまえほんとに耳かなくていいの。

高山 うん。ほんとに耳かなくていい。

長島 おまえあんなに耳かくの好きなのにほんとにかかなくていいの。

高山 うん。ほんとにいいんだって。私長島が出展しなかったら一生耳かかない。

長島 無理だって。辛抱できないって。

高山 いやだろ。私きつと辛抱するよ。いらいらして汗流して無口になって歯食いしばって時々歯茎から血流して。

長島 やめてくれ。耳かいてくれ。

高山 一生かいてやらん。長島が出展しない限りかいてやらん。

長島 俺がかいてやる。(爪楊枝を取り出す)

高山 なんだそれ。

長島 つまようじだ。

高山 つまようじ。究極の耳かきアイテム。

長島 おとなしく俺の膝枕に眠れ。

高山 やめて。耳の穴がうずく。私の耳は貝のから。海の響きを懐かしむ。

長島 意味のわからんポエムでもだえるな。

高山 きゃあ。きゃあ。きゃあ。(おいかけあい)

長島 ……(ふんぞりめて)

高山 あれ。どうした。

長島 いい。

高山 なに。

長島 いい。悪いけど、おまえの耳あかが多少犠牲になってもさ、

高山 え。うそ。うそ。

長島 こんなものポキンだよ。

高山 うわ惜しげもなく。(爪楊枝をひろう)

長島 ごめん。高山。

高山 じゃ思いきって会いに行こう。その審査員に。

長島 会ってどうするの。

高山 話しきくの。三秒でどうやって見えますか。きちんと見えますか。

長島 あつてくれないって。

高山 そしたら応えてくれるよ。きちんと見ておりもすつて。基滙は明確にござりもす、つて。

長島 どうして薩摩藩の武士なんだよ。だいたい相手してくれないよ。高校生なのに、ましてや定時制の高校生  
なのに。

高山 いつてみなきゃわからんよ。

長島 相手してくれないって。誰も相手なんかしてくれないって。

高山 ……

高山、去る。

長島 あれ。おい。

長島、他の去った方向をじつと見ている。

高山、来る。

高山、手に持っている大きな作品。それを、破く。

長島 うわ。それ。

高山、かまわず破く。小さく小さくしてしまおうとする。

長島 やめろよ。それ、今度出すつて決めた奴じゃないか。小川原先生にしごかれて書いた奴じゃないか。

長島、高山を止める。ちぎった断片を、集めて。

高山 私、相手なんかしてもらわなくていい。

長島 え。

高山 私も出さない。

長島 えなに。

高山 私小川原先生に見せる。私長島に見せる。それでいい。

長島 それじゃ日本一に、

高山 何のためにかくのか。書道は。私は、まず、自分のために書く。自分が悲しいから書く。うれしいから書く。認められたいから書く、つていうのじゃないと思う。私は、

長島 うん。

高山 私を好きだと思っうために書く。

長島 うん。

高山 長島が書くから、長島の得意な字はいいんだよ。「豊」。いいじゃん。いいよ。「曲げる」より「豆」が気持ちいいんだよ。ほかの人じゃ豆あんなにでかくなならないから長島のは特別。

長島 そんなの先入観じゃん。

高山 長島は長島が好きだから、そういう時、作品はいいんだよ。

長島 俺は違っよ。

長島、高山のちぎった断片を並べ始める。元のおりの文字に。

長島 俺はそんなんじゃないよ。俺はだめだから。ちゃんと相手してほしいから。だから書くんだから。

長島、並べ続ける。

高山、それをけちらす。

長島、また並べ続ける。

高山、それを見ている。

場面転換。

津島の声 (歌っている) 牛乳がきらいな

津島 うちがつぶやくの

僕もうなづきたいの

でも黙って飲み干すの

あの夜彼は飲み干さなかった

飲み干す前にだじゃれを言われちゃった

君の夜は 白く染まった ここぞやととやととやとと

ひとり、小坂が入ってくる。廊下のほうを見ている。津島は廊下で歌っているようなのだ。  
退場する高山、長島。

津島の声 (歌っている)

一限目と二限目の間

運動場はしろいミルクの色

自転車はきらきらとミルク色

防火バケツはへこみぎみミルク色

二人目、向田が入ってくる。廊下のほうを見ている。

津島の声 (歌っている) ほんとの色はほらここにあるほら

毎晩 見る ほんとの色

国語の先生が雑巾かけて

三人目、大池が入ってくる。廊下のほうを見ている。

津島、入場。三人に向かって歌う。

津島 (歌っている)

バケツそまるにこり水

ミルク色 ミルク色

僕と君のミルク色

(歌い終わって) な。

小坂 それなに。

津島 だから、歌って。

向田 それ二番？

津島 そう。二番。

大池 なに牛乳が嫌いなのって。それ津島うちのことじゃん。

津島 だよ。だから言ってるじゃん。

向田 津島うちがつぶやくの、って。

津島 (うたう) 津島うちがつぶやくの、

大池 津島うちが牛乳はいたって歌じゃん。

津島 そうだよ。

大池 津島つちが吐いた牛乳がどうしてそんなに感動的になっちゃうんだって。

向田 すこいよ。

小坂 自転車置き場までミルク色って。

向田 すこいって。

小坂 運動場はきらきら

向田 すこい大量にふいてるって。

大池 それが僕ときみのミルク色って。

向田 私のじゃないって。

小坂 ありえないって。

津島 うそじゃないでしよ。

大池 毎晩長島君に駄洒落言われてるもんね。

津島 感動的じゃん。夜を白く染めるんだよ。

向田 だから牛乳吐いちやっただけでしよ。

小坂 何番まであるの。

津島 ん。何番でもいいよ。

向田 いいってどういうこと。

津島 誰を主人公にしても作れるから俺。

大池 作れるって歌を？

津島 作詞作曲津島つち。グレイト。

小坂 うわなにそれ。

大池 自信つけちやっただ。

津島 どう？大池さんの三番にする？

大池 先生にプレゼントする歌でしよ。先生のこと歌にしないと。

津島 先生のはトリだよ。ラストにくるんだよ。

向田 歌長くなるよ。先生三十分くらい待たせるよ。

小坂 いやあの人なら待つねきつと。

大池 そうか。

小坂 そうだよ。

津島 な。歌おう。

大池・小坂・向田 いやだよお。

津島 ごめん。みんなの先に作ったらよかったかな。

小坂 いやだよ。どうせ変なとこ歌にされるんだから。鉛筆箱落とすの、授業中だからみんなびっくりするの、とか。

津島 あ。それ。小坂さんの歌。

大池 メモるなメモるな。

小坂 ああね。私ね。すこい音痴で。

津島 うん。

小坂 小学校の頃から音楽の時間苦手。

津島 そんなの俺も苦手だつて。

小坂 ほら。だったら。  
津島 だけど音楽は違うでしょ。音楽の授業と音楽は違うでしょ。  
大池 どういうこと？  
津島 音楽の授業はき。へ長調は下の音がシャープでとかわけわからんこと言って眠らげてください。  
向田 それきつとてきとうだね。  
津島 音楽は違うよ。音楽はいいよ。歌なんか機嫌のいいときに歌うじゃん。歌わないの？  
小坂 歌わない。  
津島 うそ。鼻歌だよ？  
小坂・大池・向田 歌わない。  
向田 さん、はい。  
小坂 ……（赤くなつて顔を隠す）むりですう。  
津島 うそお。顔赤くなった。  
大池・向田 かわいそお。  
津島 じゃそれがき。かえつてき。プレゼントになるんじゃないの。  
小坂 どういうこと。  
津島 小坂さんがさ。乗り越えてさ。歌を歌ってあげてるんだつてことになったらさ。すごいプレゼントじゃん。  
向田・大池・小坂 たかが歌。  
津島 されど歌。  
向田・大池・小坂 け。  
津島 なにか心の中の。それがなにか、大きくここ（自分の胸）にあるものをのりこえて。外に出たときにね。  
小川原先生泣くよ？  
向田 学校すら辞めようと思ってるのに、歌えるわけない。  
津島 え。なにそれ。  
大池 うそ。向田さん。  
小坂 （手をあげる）  
大池 うそ。話したじゃん。  
向田・小坂 （二人手をつないであげる）  
大池 二人に話したじゃん。なにそれ。降参つてごう？  
向田・小坂 （ふたり、ゆっくり手をあげたり下げたり）  
大池 うそ。修学旅行、考えるつて。  
向田 考えたんだけど、でもまずまず。  
小坂 うん。  
向田 まずまずつらくなるし。  
大池 うそ。学校？  
向田 居場所じゃない。  
小坂 うん。  
大池 うそ。うそうそうそ。  
津島 歌うべきだ。  
大池 え。  
津島 だったら歌うべきだ。だからこそ歌うべきだ。絶対歌うべきだ。歌って歌って歌って。

小坂 理屈がわからないよなに。

津島 聞きたい聞きたい俺小坂さんの歌聴きたい。俺向田さんの歌聴きたい。聞かせて聞かせて聞かせて。

向田 歌なんてだいたい人前で歌うものじゃない！

津島 え？

向田 ……どうして？どうして歌わないといけないの？強制するの？私もういいって。

津島 えなんだよそれ。

向田 大池さん、話しかけてきてくれてさ。うれしかったよ私。この学校の皆もいい。昼間の高校とやっぱりなんか違う。話しかけてきたそう。話しかけてこなくてもね。皆見ないから。それだけでもいい。私ここで、なんとかしようかな、つてちよつと思つた。

大池 うん。

向田 でもね。大池さん、笑うから。ある日来たら笑ってるから。

大池 え。いつ。

向田 朝。小坂さんと。

小坂 え。私。

向田 笑ってる。私じゃなくて、小坂さんなんだ。やっぱり。ほら。私じゃない。

大池 違つよ。そこに向田さんが加わってくれたら、

向田 でもそもそもどうして？どうして友だちがいらないといけないの？どうして強制するの？いいじゃん。いら  
ないじゃん。歌があつたら歌わなくちゃいけない。電車が走つたら乗らなくちゃいけない。男と女がいたら恋  
人を作らなくちゃいけない。高校があつたら通わなくちゃいけない。命があるんだから粗末にしちゃいけない。  
うるさい！うるさいうるさいうるさい！ほつといて。私になにも押し付けしないで！うるさいうるさい  
うるさいうるさい！(走り回る)

小坂 (大きな声で、皆を止める) 私も。私も私も。

向田 なに。

小坂 向田さん、私もそう思つてたよ。

向田 なにを。

小坂 大池さん、笑ってるつて。私じゃないんだつて。小坂さんなんだつて。

向田 え？

小坂 私たちつてそうなんだよ。

津島 ほら向田さん、

小坂 だけどわかつててもそれは消えてくれないから。

津島 え？

小坂 津島つち知らないでしょ。こんな感じ。怖いんだよ。ぞぞつとするんだよ。落ちていく感じ。足元から落  
ちていく感じ。

向田 うん。

津島 え？

向田 だから歌えないよ。

大池 ……うん。

間。津島、机と椅子を積み上げ始める。ピラミッドにして少なくとも四段。高くして。

津島 (椅子をその山に投げる) うーりやあ。(ぐずれるのを見届けて) うーりやあ。(地面に柔道の受身空を思い切り飛び蹴り、スライディングタックル、頭突き。あばれまわる。)

大池 津島っち。津島っち。

皆 登校してきた。見ている。

高山 なに。津島っち。

津島 どんなに暴れてもぎ。

高山 ……

津島 どんなに机壊してもぎ。窓ガラス割ってもぎ。人殴ってもぎ。バイク盗んどぼしてつるんでパトカー壊してもぎ。なにもどうにもならないからぎ。

長島 だよな。だから足洗ったんだよな。

津島 嫁さんもらって嫁さんかわいくて子どもできて子どもかわいくて

長島 だよな。それで十分いいんだよな。仕事さついけどあいつら待ってて夜眠たいけど学校に連れて最高な感じなんだろう。

津島 でもそれほんとかな？それほんとに最高なのかな？

長島 なに。最高じゃん。いい感じじゃん。津島っち今ここで皆に尊敬されてぎ。皆津島っちのこと好きでぎ。

一応ほら俺たち無理やり歌だつて練習してるんだよ？

伴 全員じゃないよ。

長島 そりや全員じゃないさ。向田さんたち歌ってくれてないけどぎ。

高山 無理やりだよ。

長島 そりや無理やりしぶしぶ、つて奴もいるよ。

高山 おまえだつて。

長島 そりや俺がそうなんだけどぎ。だけどほんとに津島っちのことが嫌いだったら歌なんか練習しないよ？だろ？津島っちが作ったからもうしゃあないなあ、つてそういう無理やりしぶしぶだよ。すごいじゃん津島っち。俺なんかひねくれものだよ？普通歌なんか練習しないんだよ？いい感じじゃん。

津島 椅子を振り回す。机を椅子で殴る。殴る。殴る。逃げ惑う皆。いったん落ち着く。

その間に小川原、教室に入っている。呆然と見ている。

津島 じゃどうして？なに？歌ってなに。どうして歌わせたいの？どうして押し付けるの？どうして強制するの？

高山 強制じゃないよ。誘ってるだけじゃん。

津島 でもそれが人を苦しめることになつても。

高山 苦しめようと思つてやつてるわけじゃない。

大池 でも実際苦しんでたら？

高山 それはそれで自分のことばかり考えてるからでしょ！

津島 (さへぎつて) 違うんだよ。俺なんだよ。俺。俺がさ。気になるんだよ。ちゃんとかわいそうなことになつてないか？泣いたりしないで毎日学校に来れるか？つて気になるからさ。

長島 津島っちがいい奴だつてことじゃん。やさしい男だつてことだから。



津島 ほんとじゃないからなんだよ。(暴れ)ほんとじゃないから。ほんとじゃないから。

高山 なにがほんとじゃないの。ちよつとまつて。

津島 なんだか足洗ったのにさ。まともになれたのにさ。でもその先にまだなんかあつてさ。きつとあるんだよ。

高山 なにそれ。

津島 わかんないよ。でもあるからきつと気になるの。みんなのことが。ちゃんとしてほしいの。泣いてほしいくないの。かわいそうなことになってほしくないの。ほしくなくてほしくなくて狂ってしまったいそうになるの。で実際狂つてくるんだよ。伴さん。

伴 ……うん。

津島 でもそれはほんとと自分のことなの。

問。

小川原、机、椅子をきちんと並べ始める。

向田 先生。

小川原 授業始めるぞ。

机、椅子を並べる小川原。皆、見ている。

小川原 (津島を見る) 授業するぞ。津島っち。

津島 ……

小川原、机と椅子をまたきちんと並べ始める。

しばらく遅れて、皆も並べ始める。

それに参加していなかった長島。

長島 甘えるな。

津島 ……

長島 甘えるな。なにがきつとあるだよ。なにがその先にまたあつたから、だよ。だからって暴れやがって。

時々こうやって暴れて皆を怖がらせやがって。迷惑なんだよ。

津島 ……

長島 ギヤップか。普段おとなしいのこれと、ギヤップがほしいのか。狙つたとおりか。ほんとと津島っち心が荒れてて怖いんだよ、だけどがんばつてきちんとしてる、しようとしてるのがえらいよね、すごい偉いよね、って言われたいの。好かれないの。うまい。うまいこと考えたね。

津島 ……(押し倒す。なぐりかかる。)

長島 ……(一方的に押し倒されて)やれ。殴れ。蹴れ。やってくれ。殴られてやるから。蹴られてやるから。

でまた一段とかわいそぶりっこしてくれ。でまた一段と皆から好かれてくれ。

津島 ……(殴れない)

長島 むかつくんだよ。中途半端にいい奴になりやがって。それでなんだかいい感じで生きていけるよって優等生みたいになりやがって。

高山 長島もいい感じに生きていたらいいじゃん。

長島 いけるかよ。いけないんだよ。俺たちはもうおしまい。完全におしまい。こんなところ来た瞬間におしまいなの。俺ね。日本一になりたい。

高山 うん。

長島 なりたいよ。日本一に。猛烈に。なりたい。なりたかった。

高山 そうじゃん。いいじゃん。

長島 だけどそれはさ、日本一にならないと俺なんの値打ちもないからじゃないの？そう思ってるからじゃないの？なんだよ高山。おまえどうして書道なんかこだわるんだよ。定時制定時制って気にするなっていうけど、気にするのはよっぽど、おまえのほうだろ！

高山 なにむちゃくちゃを、

長島 じゃなんだって。日本一になんかならなくてもいいだろ。俺たち日本一でない値打ちないのか？ないんだよ。そう思ってるんだよ。俺小川原先生と会えてよかったもん。俺小川原先生に書道じこかれてうれしかったもん。おまえみたいな奴でも日本一になれる、してやるってじこかれて、無茶苦茶無茶苦茶うれしかったもん。けどなんだよ小川原先生。小川原！

小川原 ……

長島 日本一ってなんだよ。なんですか。あんちんけな、ゴミみたいな、結局ゴミみたいな大勢のひとつくらいにしか扱われてなくて、はい次、はいじゃ次、日本一を目指すっておかしくないか。それって定時制を馬鹿にしないか。馬鹿にするから日本一を目指すんだろ。

小川原 (歌う) 牛乳がきらいなの

津島 つちがつぶやくの

高山 え。

伴 先生。

小川原 覚えるよ。

津島 え。

高山 そうなんですか。

津島 うそ。

高山 やっぱり。

伴 聞こえてたか。

津島 高山さん声でかいから。

伴 津島つちでしょ。

小川原 もういい。わかったから。感謝、わかったから。練習してくれてるのだけで十分だから。でもな。

高山 はい。

小川原 疲れる。

伴 はい？

小川原 疲れる。正直。なにやってるのおまえら。なにやってるの俺。感謝。なにそれ。そんなのいいんだよ。おまえらさ。はつきり言うとき。落ちこぼれてるでしょ。落ちこぼれなんだよ。だからこんなとこ流れ着いてるんだよ。わかってるの？

大池 え、

小川原 わかってる。そうだよ。それぞれ事情だってあって。時々はやむをえない事情だなあと考えちゃうこともあって。いじめ。登校拒否。家庭崩壊。劣等生って決め付けて差別する教師。親。被害者だ。おまえらさっ

とこの社会の被害者だよ。だけどなんだ。被害者ヅラして甘えててそれでいいのか。

小坂 先生ひどい、

小川原 だったら授業聞け。前向け。寝やがって。だらだらしやがって。今すでに負けているのにあいつらの倍頑張らなきゃまずまず負けるのに。なのに頑張らない。向上心もてよ。もたない。情熱燃やせよ。そんなものない。負け犬。負け犬負け犬負け犬だよ。最初から負け犬根性なんだよ。小さい時からほめられた経験が少ないから。小さい時からだめな奴扱いされた経験ばかりだから。わかっている。こっちの責任もある。だから頑張って熱くなって職員室で浮いている。なのにおまえらは五年やっても十年やっても全然変わらない。世の中のすみっこのほうでこぼれて、落ちて、たまって、よんどんで。感謝なんかいらん。感謝なんか全然いらん。そんなクソの役にもたないもの、全然全然全然いらん。そんなものより頑張ってみせる。ちよつとでいいから頑張ってみせるよ頼むから。

伴 そんなこと先生(思ってたんですか)、

小川原 むなしの。時々むなしの。いやあな気持ちになるの。勘弁してくれ。

大池 先生ひどい。

小川原 親が離婚したのは君らのせいじゃない。いじめの標的になったのは君らのせいじゃない。こんな世の中になったのは君らのせいじゃない。だからといってここに、お父さんがわりを求めても、恋人がわりを求めても無理なんだよ。先生はもてるタイプじゃない。

大池 え。

小川原 臆病ものだ。恋愛経験が少ない。いつも相手から言うてくれるのを待ってるから。待つて待つて待つてから。今度の結婚もそうだ。煮え切らないもんだ。だけど結婚する。わかっている。そんなのだめな結婚だ。だめ男だ。だめ人間だ。受身でいい子でいい大学出てそのまま教師になって。はつきりしない。いつも今でもだからもういやになった。ここではやめる。やめた。頑張っていく。頑張ってきた。大きい字を書け。うまい字はいらん。太い字を書け。黒い濃い字を書け。祈ってたつてだめ。書かなきゃだめ。自分を無条件に認めてくれる世界を求めても、そりや無理なんだよ。自分が、自分をきちんと認めてやらないと。どうにもできないんだよ。

大池、小川原を平手打ち。

意外な力の強さに、小川原は倒れる。

長島 大池さん。

大池 どうせこの世は終わるんだよ。

小川原 え？

大池 どうせオゾン層に穴が開いてどんどん広がるんだよ。地球は温暖化して水が干上がって世界は終わるんだよ。

高山 え？

大池 原子力発電所の核のゴミは何万年も放射能を吐き出して生き物を殺すんだよ。その前に石油資源はもう百年もたなくてなくなる。電気も消えて冬は寒くて私たちは皆死ぬの。立ち向かってもなんの意味がある？

小川原、立つ。言い返すように。

向田、そこに走って行って、小川原をたたく。

小川原、倒れる。

小川原 また起き上がる。立つ。

小坂 そこに走って行って、小川原をたたく。

小川原、倒れる。

大池 でも先生、私は、今、先生が好きだよ。先生が好き。それでいいと思うんだよ。

伴 (歌う) 学校がきらいなの

彼女がつぶやくの

伴・津島 僕もうなづきたいの

伴・津島・大池・小坂 でも黙ってみているの

伴・津島・大池・小坂・向田・長島 あの夜君は笑わなかった

伴、机の上に乗る。

伴 私のおなかの赤ちゃんのお父さんは。

小川原 え。

伴 私のおなかの赤ちゃんのお父さんになる人は、別れ際、バス停で「もうちょっとで来るね。」って繰り返す。

話題がなくて。バスが来る。あの人は乗る。私は手を振ってほしいのに、バスが走り出してもあの人は落ち着いてる暇がなくて、席を探してる。あの人はやっと振り返る。私をさがして。うなづく。かすかにうなづいて。声も出さないうで。津島うち。

津島 うん。

伴 きいて。津島うち。私さ。

津島 うん。

伴 きいて。きいて津島うち。私さ。

津島 うん。

伴 ……

伴、別の机の上に乗る。

津島 いいよ。もう。言わなくてもいいよ。

伴 あの人はこのあとどうするんだろう。

津島・伴以外 (ささやく) 恋人がほしい。

伴 快速電車に乗って。今から。

津島・伴以外 ただだまってそばにいてほしい。恋人がほしい。(以下、伴の台詞を重ねて) 私たちはここにいて夜の教室で、恋人のことを思っている。恋人は今となりにいる君のことじゃない。今向かいに座る君のことじゃない。恋人は今僕の中にいるはずで。僕の中にいるはずの恋人が、今僕らの中にはいてくれない。世界はもうすぐ滅ぶのかもしれない。世界はもうすぐ滅ぶだろう。だけどそんなこと、僕らには知ったことじゃない。僕らはここにいて、ここにいていいんだよと誰かにつぶやいてほしいだけなんだ。見あげると雲が白い。夜なのに雲は白くて、見える範囲の景色の中には白い雲とあの人しかいない。風が吹く。風が吹くのは白い雲が動くからわかる。そこに立って風を見あげると、世界のすべては風で、世界の空気の体積はすべて風が埋め尽くしていて。ゆっくり風が動く。俺は一人だ。俺は世界で一人だ。世界は俺と風とふたりつきりだ。大丈夫な

のに。私もいるのに。私もここにいるのに。私と一緒にいられないあの人はでもそんなこと考える余裕もなく、そこにいて。そこで、私のことも忘れて。でも覚えて。私は、ここにいる。私は、ここにいる、あの人のことを思ってる。ここにいるよ。ここにいるよ。見えないかもしれないけどここにいるんだよ。一人じゃない。あの人は一人じゃない。私ここにいるんだよ。一人じゃないんだよ。

伴 あの人帰ってから、苦しくなって涙が止まらなくなる。話し聞かないで。いやなこといっぱい言って。いっぱい言われているのに、あの人はずっとニコニコしたまま、帰る。私はいやなこといっぱい言ったまま、彼を帰すんだよ。四十分揺られてつり革につかまって、下りてホームの階段を登って線乗り換えて普通電車に乗ってバスに乗り換えて暗い住宅地の道を歩いて、見あげると雲が白い。夜なのに雲は白くて、見える範囲の景色の中には白い雲とあの人しかいない。風が吹く。風が吹くのは白い雲が動くからわかる。そこに立って風を見あげると、世界のすべては風で、世界の空気の体積はすべて風が埋め尽くして。ゆっくり風が動く。俺は一人だ。俺は世界で一人だ。世界は俺と風とふたりつきりだ。大丈夫なのに。私もいるのに。私もここにいるのに。私と一緒にいられないあの人はでもそんなこと考える余裕もなく、そこにいて。そこで、私のことも忘れて。でも覚えて。私は、ここにいる。私は、ここにいる、あの人のことを思ってる。ここにいるよ。ここにいるよ。見えないかもしれないけどここにいるんだよ。一人じゃない。あの人は一人じゃない。私ここにいるんだよ。一人じゃないんだよ。

全員が机に乗る。ひとかたまりで。

小川原に向かって歌う。

高山 (歌う) 学校がきらいな

彼女がつぶやくの

高山・大池 僕もうなづきたいの

高山・大池・小坂・長島 でも黙ってみているの

高山・大池・小坂・長島・向田・伴 あの夜君は笑わなかった

全員 あの夜だけじゃなく 笑わなかった

前の冬も その前の冬も その前の前の前の

笑おうとも思わなかった

下駄箱は茶色いニスの色

黒板は黒くなくて緑色

蛍光灯はまたたいて黄色

ほんとの色なんてここになかった

うまれた 見た ほんとの色

英語の先生がチョークを折って

君が見せた歯の白い色

白い色 白い色

学校の白い色

照明が消える。

暗転。

終わり。